北杜夫

マンボウ哀愁のヨーロッパ再訪記

青春出版社

著者紹介

北　杜夫（きた　もりお）

1927年東京青山生まれ。作家。旧制松本高校を経て、東北大学医学部を卒業。半年間の船医としての体験をもとに書いた『どくとるマンボウ航海記』が大ベストセラーになる。

「夜と霧の隅で」で芥川賞を受賞。その後、『楡家の人びと』で毎日出版文化賞、『輝ける碧き空の下で』で日本文学大賞、茂吉四部作で大佛賞をそれぞれ受賞。

また「マンボウ」シリーズなどユーモアあふれるエッセイストとしても広く知られている。

近刊は20年ぶりの本格短編集になる『消えさりゆく物語』（新潮社）。

本書は、『どくとるマンボウ航海記』以来30年ぶりで訪れた再訪の地・ポルトガルで氏が見た、過ぎ去った時間と青春の記憶とが交錯するユーモアと哀切のエッセイなどをまとめた一冊になる。

マンボウ 哀愁（あいしゅう）のヨーロッパ再訪記（さいほうき）

2000年10月10日　第1刷
2000年11月1日　第2刷

著　者　北（きた）　杜夫（もりお）

発行者　小澤源太郎

発行所　株式会社 青春出版社

東京都新宿区若松町12番1号〒162-0056
振替番号 00190-7-98602
電話　編集部 03(3203)5123
　　営業部 03(3207)1916

印刷　中央精版印刷　　製本　中央精版印刷

万一，落丁・乱丁がありました節は，お取りかえします。
ISBN4-413-03222-5 C0095

© Morio Kita 2000 Printed in Japan

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写(コピー)することは著作権法上認められている場合を除き、禁じられています。

マンボウ哀愁のヨーロッパ再訪記

北杜夫

青春出版社

まえがき

ずっと前から海外旅行はごくありふれた事柄になってきた。しかし、私の「マンボウ航海」当時は、まだ一般人の海外旅行が許される五年ほど前で、よほどの事でないと外国へ行けなかったから、それだけ初めて見聞する異国の事物が極めて印象的に肌に感じられたのである。

それは何も学問的なことばかりではない。たとえば船がフランスのル・アーブルに着いた折、私は特急列車でパリへ行った。途中、一カ所だけ停車したので、プラットホームに降りてみるとパンを売っていた。それを買って車中で食べ、なんという美味かと驚嘆した。さすがフランスのパンはうまいものだと思った。それは何のことはないクロワッサンであったのだが、幼少時から戦争のため国内旅行もほとんどしなかった私にとっては、大げさに言えばカルチャー・ショックなのであった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

外国旅行が自由になり、また情報の多い今では、私たちはなかなかカルチャー・ショックを受けないし、それだけ学ぶことも少なくなったのである。

外国旅行は新しい見聞をひらく以上に、自国のことをふり返ることにもつながる。五カ月半の航海中、私はしょっちゅう世界地図を眺めていたが、初めはもっとよい時代になったらどこどこへ行きたいくらいの気持であった。しかし、いくつかの異国の風物に接しているうち、いかに自分が生れた国、日本について知らないかという認識であった。

思い返せば、西ヨーロッパでは田舎といってよいポルトガルからヨーロッパに触れたのも幸せといってよい。三十年も経って、私はまたそこを訪れたが、懐しさより失望が多かったかもしれない。それは私自身があれこれの旅をしてきて見聞はましたが、それだけ感受性が衰えたためかもしれない。

ともあれ地球上を旅することは、自分という個体を旅することでもあるのだ。

北杜夫

目次＊マンボウ 哀愁のヨーロッパ再訪記

まえがき 3
1章 マンボウ・ポルトガル再訪記 11
2章 マンボウ・タヒチ追想記 49
3章 マンボウ・つれづれ旅行記 111
あとがき 198

写真提供
藤森秀郎
中央公論新社
新潮社

マンボウ哀愁のヨーロッパ再訪記

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1章　マンボウ・ポルトガル再訪記

現在のポルトガルはたしかに、まあ言ってみれば文明開化しているといってよい。しかし、私にとってはそのことは良いことではなかった。

つまり私の『どくとるマンボウ航海記』に出てくるような首都リスボンからして、近代的建物ばかりが増えてしまって、まったく昔の面影とは違っていたからである。

まずその前に、空港の税関吏からしてけしからぬ男であった。ポルトガルはマンボウ航海のとき、最初に寄ったヨーロッパの国であった。ポルトガルには最近でも滅多に日本人はやってこない。たまにツアーの団体客がくることがあるらしいが、そういう場合はスー

ツ・ケースなど調べない。たまに一人のスーツ・ケースを開けるくらいなもので、これはどこの外国でもそうである。

ところが、イギリス人だのアメリカ人だのの観光客にはぜんぜんスーツ・ケースを開けさせもしないのに、ツアーでなく怪しげなジーパン姿の三人の日本人がやってきたものだから、おそらく暴力団の者と思ったらしく、麻薬かなんかを隠し持っているのではないかと、その税関吏は、荷物を実に綿密に調べはじめた。なかんずく同行したカメラマンの藤森さんのスーツ・ケースはあんまり克明にサーチされ、内部の裏張りまではがしたものだから、スーツ・ケースの中がずいぶんと壊されてしまった。おまけに何もないと分かったのに、ソリーとも言わず、黙ったまま知らん顔していた。そのため藤森さんはあんまり怒ってしまい、その夜は、なかなか寝つかれなかったという。

それはともかくとして、私が前に船医として上陸したときはなにせ三十年前のことである。そのすべての事柄がすっかり近代化されすぎてしまっているので、懐旧の情に嬉しくなってしまうと思っていたのに、逆に悲しくなってしまったものである。

たとえば、私の乗ったのは水産庁のマグロ調査船「照洋丸」という船であったが、当時の日本は外貨に乏しく、水産庁の三人の役人は別としても、船長の次に外貨を貰えた私で

も実にちょっぴりしか金を貰えなかった。

で、港に着いたとき、リスボンの町でも新旧双方があるが、波止場の近くはダウン・タウンで、もっぱらそこしかほとんど行かなかった。その石畳はリスボン近くではパリのモンマルトルなどのそれと似たようなものもあったが、ダウン・タウンの実に貧弱な店でイワシの焼いたのなどを食べると実に安かった。大きな酒店へ行くと、丸い大樽につめてある赤ワインが一杯十円くらいのものであった。

なによりもダウン・タウンの方が石畳にしても、こまかくうす赤い石を敷きつめた道とか、或いはモザイク風に赤や黄や白の石を敷きつめた通りもあった。その歩道を修理しているところを見ていると、実に丁寧に石を並べてゆく長い時間をかけた仕事で、古い歴史の感じがしたものだ。

なかんずく、自分の店の前の舗道の石がとれてしまったのを、その主人らしき男が、不規則な石を考え考えあれこれとパズルのように置きかえているのを見たとき、私は「ああ、ヨーロッパに来たのだな」と、なんとも言えぬ気持で実感したものだ。

ともあれ、どこの国の港でも船が桟橋に着けば、閑(ひま)そうな連中がかなり集まってくるものである。そのときは正月を過ぎた頃の冬の季節だったから、毛皮のついたジャンパーを

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com